

私の南極物語 - その9 -

山梨大学 生命環境学部環境科学科 教授
第38次日本南極地域観測隊越冬

竹内 智



専門はプラズマ物理、環境科学。プラズマ衝撃波による宇宙線加速や低炭素社会に向けたBDF（廃食用油から精製されるディーゼル燃料）の活用に取り組む。越冬ではオーロラ観測に従事。

いのち輝く南極の夏

南 極の夏は駆け足でやってくる。それまで零下十数度であった気温が一週間ほどで一気に零度付近まで上昇し、日差しも強くなる。太陽光の強い紫外線と雪面反射で顔が真っ黒に日焼けする。サングラスは必需品である。日差しの強い太陽は、南極に生息する動物達にとっては子育てのための恵みの光となっている。

▶ ハムネ氷瀑(ひょうばく)の前で:大陸の氷河が海に直接流れ落ちているところ
スケールの巨大さに心が奪われてしまう



昭 和基地の周辺にはアデリーペンギン(身長約70センチメートル)が数百羽集団で生息している集団営巣地(ルッカリー)がいくつか存在する。海岸線の露岩域で周りに落ちている小石を敷き詰めて巣をつくり、その中に2個の卵を産み落とす。それを抱卵するのは雄のペンギンである。雌は孵化後の子育てに備え餌取りに出かけてゆく。

ペンギンにとっても子育ては体力勝負である。



▲ 抱卵のひと休み
時々立ち上がってはくちばしで卵を回し、また腹ばいになって抱卵を続ける。



▲ アデリーペンギンのルッカリー(集団営巣地)

写 真を撮ろうと巣に近づいて行くと頭の羽毛を逆立て目を丸くして怒る。その格好が何ともいえずかわいい。ところが好奇心は旺盛なようで、雪上車が停車していると集団で見学にやって来たりする。危険を察知すると腹ばいになり、足で雪を蹴散らしながら逃げ出してゆく。よちよち歩きからは考えられないようなすばしっこさだ。



▶ 頭の羽毛を逆立て目をむき出しにし、お互いを確認し合っているつがいのペンギン



◀ 小石を敷き詰めた巣で交尾中のつがい

ア デリーペンギンの天敵はナンキョクオオトウゾクカモメ（盗ガモ）である。羽根を広げると2メートル近くにもなる雑食性の鳥である。ペンギンのルッカリー横の砂地に巣を作り、盗賊のようにペンギンの卵や幼鳥を狙いってルッカリーの上空を低空飛行している。ルッカリーの周りにはいたるところにペンギンの死骸が転がっていた。盗ガモにはテリトリーがあり、他の盗ガモが侵入してくると羽根を広げ鳴き声を荒げて相手を威嚇する。人が巣に近づこうものなら、頭めがけて急降下してくる。

切 り立った岩場には雪鳥（ユキドリ）が生息している。その名の通り、雪のように真っ白な羽毛で包まれている。岩場の上昇気流を利用し、透き通った紺碧の空で遊覧飛行を楽しんでいる姿には目を奪われてしまう。ユキドリの巣は岩場の穴の中に作られている。カメラを向けても逃げ場がないため、ただじーっとしている姿はいじらしい限りである。ユキドリが多数生息していることから名付けられた雪鳥沢は、両側が切り立った岩壁になっている。その沢の地面は、雪ではなくユキドリの羽で白く覆われている。どれくらいのユキドリが犠牲となったのだろうか。ユキドリの天敵も盗ガモなのだ。



▲ 岩場の穴の中でじっとうずくまるユキドリ



◀ 岩場の上昇気流を利用して遊覧飛行中、写真の中央部に羽を広げたユキドリがいる。背景の海氷上には、大陸から流れ出た氷山がいくつも見える

▶ テリトリーに侵入してきた他の盗ガモを威嚇するつがい。近くの砂場に産み落とした2個の卵を守るため、羽をばたつかせ、鳴き声を荒げていた



海 氷が緩みクラック（割れ目）ができると、そこからアザラシが顔を出す。暖かい日には海氷の上で日光浴をしながら気持ち良さそうに昼寝をしている。腹ばいになって近づくと眠そうな目をして頭をもたげ迷惑そうな顔をする。アザラシの天敵はいないが、うっかりするとクラックが閉じて海氷上に取り残されてしまう危険がある。実際、野外観測に同行したとき海氷上や岸辺でアザラシの死骸をよく目にした。親アザラシからはぐれ迷子になってしまった子アザラシだろうか。海の中とはちがひ、海氷上ではすべてのものが凍ってしまう世界である。アザラシといえども例外ではない。



▶ いぶかしそうに頭をもたげたウェッデルアザラシ



◀ 威風堂々
皇帝ペンギンが昭和基地
を見学にやってきた

南 極の厳しい環境に適応した動物たちも自然の冷酷さに直面しながら生きていく。何よりも、この動物達の最大の天敵は、自然環境を汚染・破壊する人間であることを忘れてはならない。

次号、その 10 へ続く（10 部作・完）